

野生と生きた 88年

高橋 清 (29C 応化)



カナダ モレーンレイク

その3：カナダに移住を考える

時の流れに乗ってここまで来て、ようやく当時の大日本インキ化学工業株式会社（現:DIC 株式会社）の傍系、日本ライヒホールド化学工業株式会社に入社できた。全社で15名ほどの新入社員を、大会議室に集めた歓迎式典において、今は亡きDICの川村社長は、式がいったん修了した後、一人一人に入社の心構えを質問された。それぞれがほぼ同様に「一日も早く会社のために役立ちたい」、或いは「早く一人前の社会人になりたい」などの趣旨の返事をする



日本ライヒホールド
化学工業株式会社

中、僕は「好奇心を持って仕事をして、新製品の開発をします」と答えた。

この言葉を社長が記憶に留められ、その後、社長にお目にかかる度にこの言葉が持ち出されることになった。1966年、カナダ移住が決まって退職の挨拶に出向くと、

「お前にヨーロッパ出張をさせたのは失敗だったよ、好奇心を忘れるなよ」と、失望されたようなお言葉を賜ったことは、昨日の出来事のように、そして海外に移住する計画に唯一の胸を痛めた記憶として僕の心

に残っている。

この米国企業との提携でできた子会社は、設立してまだ2年目で、当時の入江技術課長はアメリカで長い経験を経た秀才でした。始業前の数分間は、未だ数える程しかいなかった社員の間で雑談を楽しみ、技術部員の緊張を解きほぐすひと時を設け、一日の自由な意欲を掻き立てるきっかけを作って下さった。この朝の雑談は、当時、成長期にあった日本企業の緊張した職場を仕事で訪問する機会が多かった僕には、素晴らしい、稀な環境を造った入江さんの素晴らしい試みだったことを今も強く感ずる。

やがて課長になって、紙の耐水性を上げる樹脂の開発に関して、環境を悪化させる物質を出さない製品の開発に集中した。

この間、アメリカ本部の技術を基にし

て、独自の開発を続けることができた。これらの柔軟性のある入江部長の部員への指導は、その後の日本独自の幾多の新製品の開発を促すことになる。日本で僕が関わって開発した製品のの一つが、アメリカの親会



社でも製品化されていたことは、十数年後に、カナダに移住して、アメリカの会社の同系列に入社出来て間もなく、知ることになった。入江部長の鋭い分析力と機転の敏速さについては、技術分野以外でも表現された、今も忘れもしない思い出話がある。入社数年後に結婚し、子供が生まれた。出産休暇が終わった朝、研究室に戻って長女の出産の挨拶をすると、当時は課長だった入江さんが新生児の名を聞くので、「僕の名の「キヨシ」と妻の「ミナコ」から採って「ヨシミ」（芳美）にしました」と言うと、間髪を入れずに、「じゃあ次の児は「キナコ」だな」と言われた。僕には、このクイズにしばらく考えないと答えが出なかった。暫くその意味が解らなくてぼーっとして居ると、傍で聞いていた仲間には大笑いされてやっと気が付いた。

やがて研究管理課長を経て、日本橋本社の技術サービス部門に移り、日本中の製紙工場の訪問に月の3分の2を費やし、技術サービスの向上に徹した。その後、化粧板を製作する子会社に転勤が命じられ、技術部長になったが、同時に川村社長からヨーロッパ出張を命じられた。親会社のあるアメリカへの出張は、社内の上層部では時々あったが、ヨーロッパは稀であった。仕事は、新しくドイツから購入する紙の樹脂含侵機に関する機能管理の研修が主なものであったが、社長からは、「それよりも2、3週間、好きな国を回って、何でも好きなことを学んで来い」というごく自由な指示を貰った。当時の海外輸出入に関わる2、3

の商社に依頼して、スイス、チューリッヒ市のBASF社を最初の訪問先と決め、こっそり休



アイガー北壁

日にアルプスを歩く予定を立てた。到着翌日の金曜日に、丸一日を掛けてBASF社を訪問し、研究室から工場を見学した。その日の夕方に、車でインタラーケンに向かい一泊し、翌日、高山鉄道でアイガー北壁を見にクライネシャイデックの駅で降りた。アイガー北壁が正面に見える峠間で、ビジネス用の革靴と背広姿で歩いた時は、多くの登山服を着た人たちからじろじろ見られたことを思い出さず赤面する。学生時代から夢見たアイガー北壁のすばらしさ、駅で買ったサンドイッチを食べながら、小一時間独りで岩の上に座っていた。

その後イタリア、フランスを2週間ほどかけて回り、幾つかの現地の日本商社に迷惑をかけながら、化学会社を片端しから訪問して、工場見学やら、技術製品の説明を受けた。要はこの世界でどのような化学品が、どのような工場で開発されているかを「勉強」したが、社長が「何か成果を上げることが考えずに、世界でどのような製品が生まれているか、お前の好奇心で見て勉強してこい」と励まして下さったことが大きな支えになった。未知の海外で、片言のドイツ語しかできなかった当時の僕にとって、生涯を変える3か月の旅となったことを思い出すと、川村社長に何もお返しでき

なかった自分が今も悔やまれる。こうして約2週間をあっという間に過ごし、毎日の訪問を通して全く知らない社会を僕なりに満喫した。ようやく、前述したメラミン樹脂化粧紙を造る、当時としては全く新しい技術を持つ、デュッセルドルフのある会社に到着した。現在は、合成樹脂のタイプも変わり、より生産性の良い化粧板が変わったが、当時の形式がその過渡期だったことは10年以上経ってから分かった。とにかく当時最新の技術であった含侵機の製造会社と、同市内にあった工場の間を行き来して含侵用樹脂の合成から、含侵技術を習った。この体験が後に海外移住を示唆することになったと、その時は気付かず、唯々諾々と近代技術の先端を目の当たりにしていたようだ。

卒業後60年の今、この出張旅行が僕の生涯の大転換の源となった事は明らかだ。大学時代にドイツの科学論文を読むために覚えたドイツ語が、当時の訪問国のスイス、イタリア、フランス、ドイツは勿論のこと帰国途上で立ち寄ったスウェーデンでも、片言ではあっても大きな難関なしに通過できた事は意外であった。出張の最後になったスウェーデンの南端近く、マルメにある化学工場を訪問した時、ホテルにチェッ



スウェーデン マルメ市

クインした折の出来事を今も思い出す。チェックインカウンターに小さな日本の国旗がスウェーデン国旗と抱き合わされて飾ってあった。誰か偉い人が来る予定なのか、と思って、ドイツ語でWas ist es?(これは何ですか?)と受付の人に聞くと、「今日か明日、日本人のお客様が来ると言われています」と不審そうに返事、どうも僕のことらしいが、なぜ僕がその日本人だと気付かないのか、きちんと正式な背広を着て黒い革靴を履いているのに、とその夜他に日本人客が有るのか、食事の後も暫くロビーの椅子に座って様子を探ったことを今もなぜか思い出す。

この出張ではもちろん、かなりの会話の部分は聞き取れずにミスしたことは間違いないが、それでも僕にとっては予期以上に有益な世界への初対面となった。それは世界の技術社会が如何に日本と異なり、奔放ともいえる程の自由さと開放的な視点に立った開発をしているかという事だった。含侵用樹脂の開発にあたって、水溶性であることが大きな一つの企画であっても、含侵設備に受け入れの機能が有れば、アルコールで粘度を下げて浸透を良くするとともに、過大な紙の膨張を防ぐ、と言った柔軟性は、当時の僕には驚きだった。水溶性であれば最後までそれにとどまり、アルコール使用の利点を忘れることをしない余裕と言うか、自由さを学んだ。

帰国後、今までの研究室勤めと、技術サービスによる出張に明け暮れてきた日本での生活は、工場への出張で学んだ含侵技

術を工場生産に活用する日に明け暮れたが、1年もするとようやく生活が落ち着いてきた。その頃、子供が間もなく小学校に入る年齢となり、色々周りから聞こえる小学校での必要以上に厳しい規制や、ゆとりの無い学校教育の現場を想うと、ヨーロッパでの自由で選択肢の多い体験と比べて次第に疑問が出始め、それとなく海外移住に関心が高まった。僕が海外で体感し、感知した異なった世界を子供たちにも経験させ、新しい環境で自由に成長させられないものだろうか、そして僕が見た範囲では多くの海外の人たちはもっと自分を中心とした、余裕のある生活をしていることに惹かれていった。スイスで間近に見たアイガー北壁、あの国に住めば北壁に登るのは夢ではない、それともまだ見ないオーストラリアの大草原はどんなところだろうか、僕はいつの間にか、ドイツ、スイス、オーストラリアを夢の対象として選んでいた。

そんな時に、時折訪問してくるアメリカ本社からの訪問社員との意思疎通を図るた

【思い出】



赤城山、大沼の夕立



土樽から山荘への道



カナダの山を歩く著者



仙の倉沢、ニシゼンにて

め、社内で英会話の講習を週一で企画した。当時の新聞で知ったその講師は然しアメリカ人でなく、バンクーバー近郊から訪日中のカナダ人だったことがカナダ移住を考えるきっかけとなった。彼が茶飲み話で、移住ならカナダ以上に良い国は無いよ、とごく簡単にカナダの社会の紹介をしてくれ、技術移民の話をしてくれたことが僕のカナダへの関心を高め、それとなくカナダを対象として調べ始めたが、今のよう

にネットですぐに情報の得られる時代ではない。まず大使館に向いて資料を集めることになったのは1965年の事である。

(続く)